

自立した主権者 をめざして

▶ ▶ ▶ Vol.37 通俗道德のワナ

KEYPOINT

- あなたは社会的な課題について日ごろ考えていますか？
- また、考えていることについてどんな活動をしていますか？

SUMMARY

日本は「自己責任論」が強い社会だといわれますが、そうした中で少しずつ認識を変えようという動きも出ています。しかし、困難に直面した人に対する声かけや態度はどうしても「自分の価値観」が反映されてしまいます。自分の思う「正義」は本当に正しいのか、一度振り返ってみましょう。一人一人の価値観のアップデートが、社会全体を変える力になります。

お知らせ

(11月1日発行)1面論文について、構成や流れや受け止め方等をコメントする場を YouTube チャンネルで配信しています。毎月配信しますのでニュースと併せてご視聴ください。



一面的な価値観の押し付けは暴力に等しい

苦難を克服した人は「強く」見えます。例えば「いじめ」について考えてみましょう。いじめを受けることは辛いことです。学校に相談してもすぐに解決することは少ないし、それが原因で不登校になったり、転校したりという結果を招くことも多いものです。そのとき、「無理に学校に行かなくても良いよ」と伝えたり、「その場から逃げることが負けることではないよ」ということは、最近ではよく耳にする対応です。昔のように、「いじめがなんだ、言い返せ」と言ったり、「辛くても学校を休むことは許しません」と言われたりするよりはずっと気持ちが楽になります。

そうした中で自分の環境を整え、あらためて様々なチャレンジをしていくことは理想的なことでしょう。それで救われる子どもは沢山いると思います。

しかし、そうではなく、いじめを受けても、相手を見返そうと勉強をしたり、スポーツを頑張ったりして、必死に自分の居場所をつくることを決意し、努力する子どももいます。そのことについて、「無理に頑張らなくてもよいのに」と言ったり、「逃げてても良いのだよ」ということは、はた

してその人にとってうれしい声掛けとなるのでしょうか。反対に、「努力するのは当然のこと。あなたは強いからできるでしょう」と言われることも、一見励ましているように見えて違うように感じます。「強くあれ」というのは自分が困難に陥っているのは自分の責任なのだから、自分で這い上がれと言われているのに等しい発言です。

いじめられて嬉しい人などいるはずもなく、どのような対処方法であれ、彼らが必死に考えて出した結論です。外からみたら肩ひじを張って無理をしているように見えたとしても、何食わぬ顔で淡々とその場を乗り切っているように見えたとしても、そうせざるを得なかったことをまずは認め、受け入れることが大切です。

しかし、人が何かを評価するときは自分の思う正しさを基準とするものですから、なかなか思うようにいきません。誰かの「優しさ」や「励まし」からくる言葉は、反対に相手を傷つけてしまう場合があるのです。

今なお残る「通俗道德」の呪縛

ものごとを判断するとき、だれでも、自分の価値観に照らし合わせて判断しますが、その基準となる「常識」や「普通」は、生まれてから今までの体験や得た知識によってつくられます。人が違えば価値観や考え方は、皆、少しずつ違うものです。そしてそれはただ「違う」だけで、それ以上でも、それ以下でもなく、どちらが正しくてどちらが間違っているということはありません。

しかし、日本人の考える「常識」の多くは、生

活の中に深く取り込まれている「通俗道徳」から生まれるものが多いようです。通俗道徳は、「成功したのはがんばったから。貧困に陥ったのはがんばりがたりなかったから」という、明治時代から続く価値観です。明治維新という大きな変革が江戸時代の社会の仕組みを壊した結果、江戸時代の村請制による連帯責任のように、相互に助け合うことを強いられていた人びとの結びつきはなくなってしまい、社会で成功しないのは自己責任であるという考え方が広がりました。さらに、江戸時代とは違う新たな相互監視の慣習も生まれました。お互いの悪事も監視するし、逆に言うと助けられたらその恩を返す義務が生じるという監視社会ですが、この考え方は現在の日本社会にもまだ深く組み込まれていて、様々な差別を生み出しています。例えば会社を辞めて失業保険をもらおうとすると、就職中に自分で失業保険を払ってきたにも関わらず、「誰のおかげでこのお金をもらえているのだ」などと言われることがあります。これには当然の権利ではなく、弱者に「恩に着せる」という意識が感じられます。

通俗道徳のワナから抜け出すためには

しかし、今、社会は著しく変化をしています。先述のいじめや不登校の問題などは、「何があっても学校に行く」ことは正しいことでもなく、「学校に行けない」ことが間違いではないとの考え方に変わり始めました（もちろん、学校に行くことが悪いということではありません）。企業な

どの非正規雇用者の増加や女性の雇用に関するとも、個人の問題ではなく、社会の問題であると認識され始めています。通俗道徳という思考のワナから抜け出すことは容易ではありませんが、この先の社会を考えた時、「自分の今の価値観を疑う」ことは必要なことかもしれません。

もし、「困難な現状はその人の責任」と思う自分がいたら、「もしそれが自分だったら」と考えてみましょう。自分が困った時にどうすれば嬉しいか、つまり「共感する」ことから、それが自分事になり、社会全体でカバーしようという発想が出てくるのではないかと思います。

共感が広がれば、「困窮する人を努力の足りない人とみなす見方はおかしい」と誰もが言える基盤が育っていくでしょう。「誰一人取りこぼさない」という言葉が使われるようになった今の社会で大切なのは、自分の価値観（正義）を振りかざしていないか、自分自身で振り返ることです。

〈機関紙「日本再生」No.534の内容〉

2023/11/01 発行

〓人権民主主義をダブルスタンダードにせず、
〓いのちとくらし、を政治の中心に ●3-7 面/囲む会/「自国のことは自国で決める」ために/大島敦・衆議院議員 ●8-12 面/インタビュー/普遍主義的分配に潜む社会的分断の可能性とは/吉弘憲介・桃山学院大学教授 ●12-15 面/インタビュー/歴史修正主義と人権/倉橋耕平・創価大学准教授

※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の連絡先までご連絡ください。

一緒に
考えてほしいこと

- ・あなたの思う「正義」について考えたことはありますか
- ・困難に直面している人に出会ったとき、あなたはどのように対応しますか

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義」を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。